

2 研究の実際

(1) 養護教諭研修に求められる役割

佐賀県教育委員会は、教職員一人一人がその資質・能力を向上させながら、それぞれの強みを最大限発揮し、学校運営に積極的に参画していく環境を整える必要があるとしています。そのために、現職教職員のライフステージ（経験年数）ごとの研修に表1の課題を入れ、人材育成を図っています。

養護教諭の研修については、平成25年度まで県教育委員会学校教育課で実施された経年研修を引き継ぎ、平成26年度から教育センターにおいて、経年研修・専門講座を設定し、養護教諭の資質・能力の向上を図っています。（図1）

表1 ライフステージごとの研修課題

ライフステージ		研 修 課 題
0期 (養成期)	大学などの養成	大学などの養成機関で教職員として基礎・基本を学ぶ。
I期 (実践期)	前半 (1～5年目)	教職員として必要な基礎的・基本的な能力を確立するとともに、専門性を更に高める。
	後半 (6～10年目)	教職員として専門的な知識・技能の習熟を図り、実践的指導力を高める。
II期 (充実期)	前半 (10～15年目)	教職員のミドルリーダーとして活躍するために必要な能力を確立するとともに、自分自身のキャリアプランを確立する。
	後半 (16～20年目)	学校運営の推進者としての自覚の高揚を図り、広い視野に立って、学校教育を支える力量を高める。
III期 (貢献期)	21年目以降	自分自身の専門性を発揮するだけでなく、指導的教職員として、学校や地域全体のレベルアップに貢献できるよう後輩教職員を育成する力量を高める。

引用：研修体系企画検討会 「これからの教職員研修体系の在り方～研修体系企画検討会最終報告」
平成21年3月

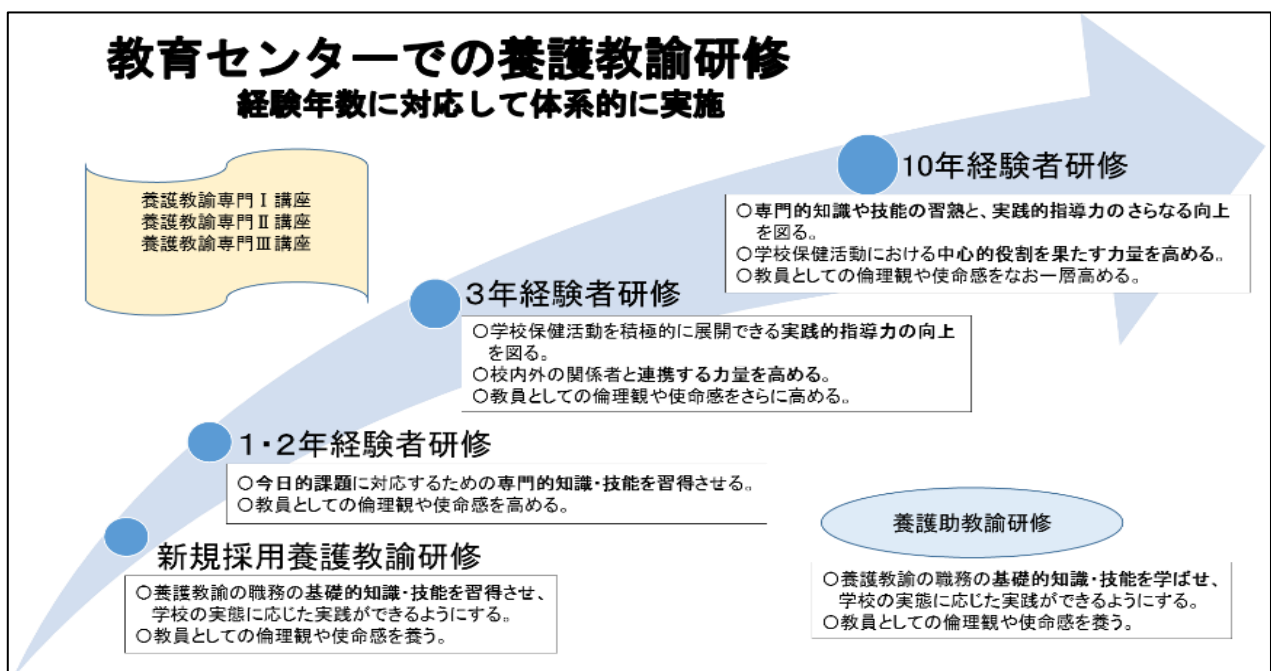


図1 教育センターでの養護教諭研修(平成27年度作成)

こうした養護教諭個々の資質・能力向上と共に、学校運営に積極的に参画できる人材育成を図る上で、教育センターとして、さらに積極的に役割を果たしていく必要があると考えています。

そこで、佐賀県教育委員会が提示している現職教職員のライフステージ（経験年数）ごとの研修課題を基に、以下の点から、教育センター養護教諭研修体系の見直しを図ることとしました。

養護教諭が経験年数を重ねて培う知識・技能を確かなものにするために、経験年数ごとに医学的・教育的知見を向上させる段階を系統化し、機能的なつながりをもつキャリアステージに応じた研修体系を見直すことは、養護教諭一人一人が子どもの保健教育実践に取り組み続ける際の支援につながると考えます。

ア 社会的な要請

これからの教員には、変化の激しい時代にあって、児童生徒に「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」などの生きる力を育成する教育が求められており、そのためには、教員の資質能力の向上がますます重要となっています。学校保健活動の推進に当たって中核的な役割を果たしている養護教諭への期待も、高まっています。

中教審答申（H20.1）において求められている養護教諭の役割は、医療機関などとの連携を推進する上でのコーディネーターの役割、保健教育に果たす役割、組織的な保健指導・健康相談の充実、心身の健康課題の早期発見・早期対応に果たす役割など幅広く、学校保健推進の中核を担うとされています。こうした、求められている養護教諭の役割を果たしていくためには、研修を通じて、健康課題解決を図ることができる資質や能力の向上を図っていく必要があります。そのためには、専門講座や経年研修が「養護教諭の職務に対応した系統的・体系的な研修の場」となる必要があります。

イ 現代的健康課題

子供を取り巻く生活環境の急激な変化により、心と体の両面にわたる様々な健康課題が起きています。平成23年度「保健室利用状況に関する調査」（日本学校保健会）によると、養護教諭が過去1年に把握した心身の健康に関する問題などのある児童生徒の数は、表2のとおり、身体に関してはどの校種もアレルギー疾患が最も多く、次いで肥満傾向となっています。アレルギー疾患は、ぜん息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性結膜炎、アレルギー性鼻炎、食物アレルギーが多くなっています。

表2 身体に関する状況（校種別）

（千人当たりの児童生徒数）単位：人

	身体に関する主な事項	小学校	中学校	高等学校
1	肥満傾向（肥満度による）	50.1	55.3	58.8
2	糖尿病	0.3	0.7	1.0
3	腎臓病	2.6	3.5	3.5
4	心臓病	11.0	12.9	13.4
5	ぜん息	64.0	50.8	37.3
6	アトピー性皮膚炎	52.0	42.8	37.4
7	アレルギー性結膜炎	42.6	45.0	29.4
8	アレルギー性鼻炎	98.4	115.1	100.3
9	食物アレルギー	36.1	40.1	37.9
10	その他のアレルギー	30.5	31.9	33.6
11	アドレナリン自己注射薬の処方を受けている	0.4	0.3	0.3
12	けいれん疾患	6.8	6.7	4.6
13	血液疾患	0.7	1.3	2.7
14	月経に関する問題	0.6	3.5	10.8
15	眼科疾患に関する問題	9.2	7.9	6.8
16	耳鼻科疾患に関する問題	15.6	12.6	12.1
17	スポーツ障害等に関する問題	1.2	5.1	7.9
18	その他	4.4	7.0	9.5

引用：公益財団法人日本学校保健会 「平成23年度調査結果保健室利用状況に関する調査結果」平成25年度4月10日 p.11

心の健康に関しては、表3のとおり、どの校種も「友達との人間関係に関する問題」「発達障害に関する問題」「家族との人間関係に関する問題」が多くなっています。

こうした現代的健康課題解決のために、今もつ知識・技能を繰り返し練習し身に付けたり、高めたりしながら、養護教諭の専門性を高めていく必要があります。専門講座や経年研修が、「健康課題に対応する知識・技能の獲得の場」となる必要があります。

表3 心の健康に関する状況（校種別）

(千人当たりの児童生徒数) 単位：人

心の健康に関する主な事項		小学校	中学校	高等学校
1	いじめに関する問題	2.5	6.6	1.8
2	友達との人間関係に関する問題	8.5	23.2	18.6
3	家族との人間関係に関する問題	4.1	10.9	9.3
4	児童虐待に関する問題	2.5	2.1	0.7
5	睡眠障害に関する問題	0.4	2.2	3.0
6	過換気症候群	0.5	3.8	4.4
7	過敏性腸症候群	0.3	2.3	3.6
8	上記6・7以外の心身症問題	1.0	2.5	3.0
9	性に関する問題	0.3	2.8	3.1
10	摂食障害に関する問題	0.2	1.2	1.7
11	自傷行為に関する問題	0.2	4.5	3.7
12	精神疾患に関する問題（統合失調症・うつ病等疑いを含む）	0.3	2.3	3.3
13	発達障害に関する問題（疑いを含む）	19.4	15.3	5.8
14	その他	0.8	2.3	3.6

引用：公益財団法人日本学校保健会 「平成23年度調査結果保健室利用状況に関する調査結果」平成25年度4月10日 p.12

ウ 年齢構成の変化

図2のとおり、佐賀県養護教諭の年齢構成の不均衡は顕著になっており、近い将来のミドルリーダーの育成が急務になっています。

しかし、養護教諭は教諭と違い学校に1人配置であることが多く、日常的に校内において学び合うことが難しいため、その専門性に関することについては、管理職などの指導助言も難しい状況にあります。

そこで、専門講座や経年研修が、「先輩養護教諭から若手養護教諭への知識・技能の伝承の場」としての機能を有する必要があります。

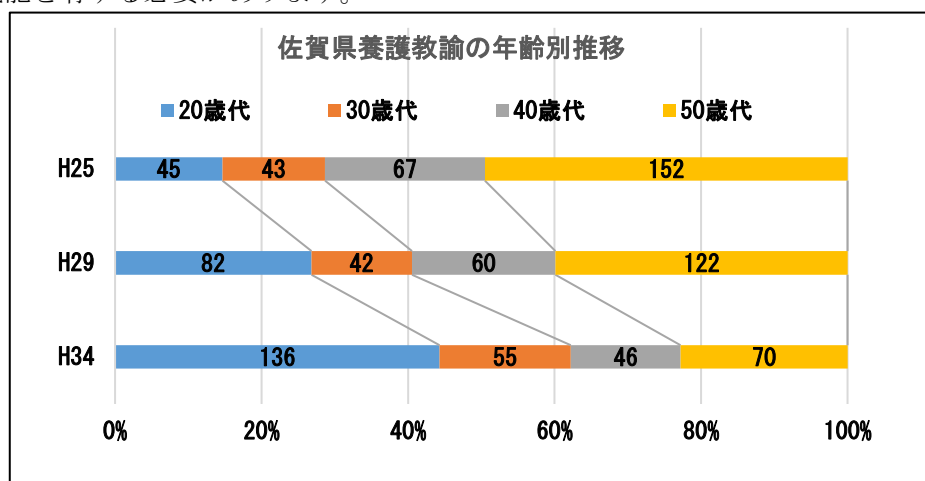


図2 佐賀県養護教諭の年齢別推移の割合

《引用文献》

- (1) 研修体系企画検討会 『これからの教職員研修体系の在り方～研修体系企画検討会最終報告』 平成21年4月10日
- (2) 公益財団法人日本学校保健会
『平成23年度調査結果 保健室利用状況に関する調査結果』 平成25年度4月10日 p.12
- (3) 公益財団法人日本学校保健会
『平成23年度調査結果 保健室利用状況に関する調査結果』 平成25年度4月10日 p.12